

## 無助詞格 ーその要件ー

三枝令子

### 要旨

話し言葉では「ちょっとこれ 持って。」「田中さん ひま？」のように、助詞を言わずに発話することがある。これを助詞の省略とみる立場もあるが、本稿では、無助詞格という一つの格と考える。無助詞格の前の名詞句Xは、通常、会話の中で語調の強さを伴って発話され、それは文末のモダリティ表現と呼応している。名詞句が格関係を示さず、単に語調の強さを伴って発話されることで、話し手、聞き手双方の眼前のもの、あるいは、共通の知識から特定の事物が「これ」と切り出される。それは話し手にとって主題ではあるが、そのXに何も限定が加わっていないという点で、「が」「は」とは異なる独自の働きをしていると言える。

### キーワード：無助詞格 助詞の省略

#### 1. はじめに

日本語は膠着語だから、助詞によって語と語の格関係を表す。しかし、次の例にあるように、話し言葉では助詞が用いられないことも多い。

(1) 妻：生ジュース あがる？

夫：うん（主婦）

(2) 時々テレビで 古い映画 やるでしょ、あれのタイトルバックのね、音楽 聞いただけで、この映画 いいか悪いか 分かっちゃうね。（日曜）

助詞が用いられない現象を、話し言葉特有のものとする考え方もあるが、実際には話し言葉に限らず、次の例のように、新聞のリード、手紙、メール文でも助詞を省くことは珍しくない。

(3) 成田滑走路問題 大詰め（日経）

(4) メール ありがとうございます。

こうした助詞を使用しない無助詞の現象を、助詞の省略と考える立場もある。たとえば、久野（1973）、筒井（1983）、Tsutsui（1984）など。しかし、近年、無助詞を一つの格と認める立場も出てきた。たとえば、楠本（1992）、長谷川（1993）。本稿では、基本的に後者の、無助詞を一つの格と認める立場をとる。すなわち、助詞の省略があることは認めつつ、それ

とは異なる無助詞という現象もあると考える。それは第一に、無助詞の部分に、もとの格を考えにくい用例があることによる。次の用例の下線部は、いずれも助詞がない方が自然だろう。

- (5) A : あ ごめんなさい 遅くなりまして よいしょ ちょっと これ\_\_持ってください  
さる? それ\_\_けっこう (B: うわっ) 重いよね  
B : うわー ほんとだ (主婦)
- (6) C : もしもし  
A : あのー \*さんのお宅様でいらっしゃいますか  
C : はい  
A : あ あのー ぼっちゃま?  
C : はい  
A : あの あたし\_\_川上と申しますけど  
C : あ はい  
A : あの お母様\_\_いらっしゃる? (主婦)
- (7) 娘 : あの ねええ  
母 : え  
娘 : お母様\_\_暇? いま  
母 : 今 あき 迎えに行くんだけど (主婦)  
娘 : うん、これ ほら あのワインカラーのブラウス買ったところと同じの  
母 : ああ、そう 清楚でいいわよ とっても。見てごらんなさい。鏡\_\_あそこにある  
あそこに大きい (主婦)

話し言葉を言葉の基本的な形と考えたとき、そこで頻繁に用いられる形式が臨時的なものと考えべきではないだろう。むしろ、ある条件の下では、無助詞であることの方が無標であると考えられる。そこで、本稿では、無助詞格が持つ機能、それが用いられる条件、また、他の格、特に「が」格と「は」で取り立てられた場合との違いについて考えたい。

## 2. 無助詞格

### 2.1 助詞が省かれるとき

話し言葉では助詞が表現されないことが多いが、これをふたつに分けて考える必要がある。一つは省略、もう一つがここでいう無助詞の場合である。省略とみることもできる例は、表現されていない格を補っても、表現内容に変化をもたらさない場合である。たとえば、先にあげた用例(2)は、次の( )の中のように助詞を補っても意味合いは変わらない。

- (2) 時々テレビで 古い映画 (を) やるでしょ、あれのタイトルバックのね、音楽 (を) 聞いただけで、この映画、いいか悪いか 分かっちゃうね。(日曜)

一般にどのような場合に省略が可能かについて、これまでに次のようなことが指摘されている。

- ① 助詞がなくても意味が通じること。基本的な助詞、「は」「が」「を」「へ」が省略されやすく、「に」「で」「から」「と」は省略されにくい。
- ② 述部の直前の助詞が省略されやすい。従って、「他動詞の場合は目的語の助詞が落ちるのに対して、自動詞の場合は、非対格自動詞の主語の助詞が落ちる。」(影山 1993 : 63)

この省略の条件は、無助詞格にもそのままあてはまる。それでは、省略と無助詞格で何が異なるかと言えば、それは後者では格が補いにくい、補うと意味合いが変わるという点にある。無助詞格には無助詞格の働きがあるということになる。

## 2.2 無助詞格の働き

対者表現の代表的なものとして呼びかけがある。呼びかけには、次のように、人名、人称代名詞が用いられることが多い。

- (9) <田中さんに向かって>田中さん、どこ行くの？

呼びかけは、聞き手に話し手へ注意を向かせる合図だから、それ自体に格はなく、後続する文との間に格関係は成り立たない。次のような用例も、この呼びかけに含めて良いかと思われる。

- (10) いらっしやいませ、いらっしやいませ。本日のご来店\_\_まことにありがとうございます。  
(スーパーの店内放送)
- (11) お誕生日、\_\_おめでとう。

(10)(11)では直接呼びかけの対象は明示されていないが、この場合も名詞句と後続文との間に格関係は成立していない。尾上 (2001 : 69) は、こうしたあいさつ表現について「<あいさつ>は、実は呼びかけ対象を求め、対象とのつながりを目指すという、呼びかけ一般の最も根元的なあり方を示していると言える。」と述べている。

しかし、次の例になると、後続文との間に格関係を想定することができる。だが、助詞は使われていない。

(12) コート、引きずってますよ。

(13) それ差し上げます。ご自由にお持ちください。

(14) 今日の君のシャツ、すてきだね。

いずれの例も、名詞句の後ろに格が補いにくい。これらの発話は、発話時に文の中で名詞句に強調が置かれることが多い。この語調の強さを文字化するために、通常名詞句の後ろに読点やスペースが置かれる。ただし、これは典型的な場合であって、次のように語調の強さを伴わないこともある。

(15) ……あなたが自首したらこの家破滅よ (ひき逃げ)

助詞を持たない言語の母語話者は、人名の後ろに読点がついた場合、聞き手への呼びかけと解釈する。そのため、次のような文を誤って解釈しやすい。

(16) 昨日、加藤さんに聞いたんだけど、田中さん、入院しているんだって。

この例で、入院している人を加藤さんと解釈する日本語学習者は少なくない。しかし、日本語の無助詞格が持つ語調の強さは、話し手が周囲の世界から何か特定のものを聞き手に「これ」と呈示する働きを持っている。発話時点では、呼びかけと同じく、聞き手の注意を引きつけて何について述べたいのか話題を切り出すことに主眼がある。後続文との格関係は、後に続く述部によってはじめて明らかになる。この点では「主題」の「は」に似ている。久野 (1973) は「主文に助詞を伴わないで現れる主格は、全て「は」の省略の例である」と述べているが、必ずしもそうは言えない点はすでに Tsutsui (1983) が指摘している。無助詞格は、「呼びかけ」と助詞を省略しない表現との中間的なもので、語と語の間に格関係は想定し得るが、話し手は言語化するほど意識していないと考えられる。無助詞格は、人に強く訴える効果があるので、次のように、新聞の見出しや広告文にもよく用いられる。

(17) 富士山、後退する永久凍土 (日経)

(18) タケヤみそ、ひと味違います。(コピー)

(19) キリッとおいしい。アサヒ新生、新登場 (電車の吊り広告)

このように書き言葉の無助詞格では、具体的な聞き手、読み手に向かって話しかけるような感じがある。その点では話し言葉に近い書き言葉と言える。

無助詞格の名詞が持つ語調の強さは、文末と呼応する。無助詞格の文でよく用いられる文末表現として、終助詞や話し手の意志表現があげられる。

(20) 君の車\_\_かっこいいね。

(21) 私\_\_帰る／帰るつもり／帰りたい。

また、無助詞格が多用される新聞の見出しや広告文では、体言止めによって無助詞格の語調の強さと呼応していることが多い。

### 2.3 無助詞格の要件

次に、無助詞格がどういう場合に用いられるかを考えてみる。無助詞格文を「XφY」と表すと、名詞句Xが次の場合に無助詞格がよく用いられる。

#### (1) 指示代名詞類

指示代名詞類は、それ自体が対象を指し示すものだから、話し手、聞き手がやりとりする会話場面では助詞を用いる必要はなく、むしろ頭に浮かんだことをそのまま述べる方が、直接的、感覚的で強く明示されると言える。

(22) ここ\_\_空いてますよ。

(23) A : これ\_\_とっても便利なんですよ。

B : ああ それ\_\_知ってますよ。

(24) 注文した料理が並びはじめた。「ここのボルシチ\_\_とてもおいしいのよ」(天国)

この場合の指示代名詞は、現場指示に限らず文脈指示であってもよい。次の例の下線部がそれに当たる。

(25) A : 「(略) てことは、娘は修学旅行に行かせても、こっちの一生の頼みは聞き入れられないんだ」

B : 「だって、あんた。それ、普通の頼みじゃないよ。人殺しの手伝いじゃないか」

(OUT)

(26) その態度\_\_いい加減にしたらどうですか。(天国)

(27) A : 「雅子さん、待って」

B : 「何」

A : 「あれ (=死体)\_\_どうしたの」

B : 「ああ、大変だったけど見事に小さくなった。」(OUT)

生き生きとした会話の中では、話し手が指し示すことができること、あるいは、聞き手が容易に思い浮かべることができること話し手が想定できれば、助詞を使わずに指示対象を直に示すのは自然な表現と言える。

## (2) 人称代名詞類

指示代名詞類に準ずるものとして、話し手自身、聞き手自身、また、話し手、聞き手双方にとって容易に思い浮かべることができる人物も無助詞格で呈示するのが自然である。

- (28) でもあたし\_\_よくわかんないけどさ (男性)
- (29) 俺\_\_今ね しょうちゅうにこってましてねえ (日曜)
- (30) おまえ、\_\_絶対に誤解してるよ (男性)
- (31) さっきの女性、\_\_お仕事の関係の方? (天国)

## (3) 話し手、聞き手双方が容易に思い浮かべることができる事物。

たとえば、話し手、聞き手の所持物・言動なども無助詞格で呈示するのが自然である。

- (32) お食事\_\_できましたよ。(天国)
- (33) お待ちしてました。お店、\_\_すぐにわかりましたか (天国)
- (34) 課長のただいまのお話、\_\_正直なところ、私もまったく同感であります (天国)
- (35) 君の車\_\_かっこいいね。
- (36) さいふ\_\_おとされましたよ。

## 3. ほかの格助詞との違い

上の用例 (36) の「さいふ おとされましたよ」では、「を」格が無助詞化されていると考えられるが、「さいふをおとされましたよ」とすると、注意を喚起するだけでなく、話し手が聞き手の動作を注目し続けていた意味合いが出てくる。無助詞格が成立する場合に他の格を用いると、限定的な意味合いが加わることが多い。それは特に「は」「が」の場合に明らかである。

### 3.1 現象文と無助詞格

日本語の文は、大きく現象文と判断文のふたつに分けることができる。<sup>1</sup> 三尾砂 (1948) にはじまる現象文の定義は、「現象をありのまま、そのままうつしたもの」で、これは仁田

<sup>1</sup> 三尾砂以来の現象文、判断文という文の分類に対して、丹羽 (1988)、野田 (1996) は、有題文、無題文という類型がまず立てられるべきであり、かつ、それは、判断文、現象文と対応しないことを指摘している。しかし、ここで取り上げている無助詞格は、もとより主題を持たない無題文ではなく、また有題文ともいいがたい。ここでの分析に必要なのは、文の構造ではなく話し手の発話意図なので、従来の現象文、判断文という分類を用いた。

(1986)、菊地 (1997) に引き継がれている。現象文の主格の呈示には「が」が用いられ、判断文の主題の呈示には「は」が用いられるとおおざっぱに言える。三尾は現象文の述語を動詞であると考えたが、仁田、菊地は形容詞述語や名詞述語の文も認める。さて、ここで問題にしている無助詞格だが、それを現象文に用いると、舌足らずな不自然な文になる。

- (39) 富士山 (が/\*φ) 見える。
- (40) 地面 (が/\*φ) ぬれている。
- (41) 花びら (が/\*φ) 落ちている。
- (42) 太郎 (が/\*φ) 走っている。
- (43) 犬 (が/\*φ) いる。

眼前の現象をそのままに述べる現象文には主題性がない。これは、現象文が主語と述語で一体化して一つの表現を構成しており、両者を切り離せないためと考えられる。しかし、上の例文の名詞句を「気づき」の文脈で発話すれば、助詞がない表現も不自然ではない。

- (39') あっ、富士山 (が/φ) 見えるよ。
- (40') 地面 (が/φ) ぬれてるよ！ 気をつけて！

仁田は、次の文を「松坂屋が営業していることを前提にして、それに反する休業中といった状況を発見しての言」と説明し、述語が名詞の場合の現象文例としてあげている。

- (44) あっ、松坂屋が休みだ。(仁田 1986 : 49)

この文は無助詞格を用いて「あっ、松坂屋 休みだ。」とした方がより自然なように思われる。先の (43) の例文を考えてみよう。

- (43') a. 犬がいる。
- b. \*犬 いる。
- c. 犬 いるよ！

「犬」が強く発話されれば、この場合の犬は、特定の犬を指し、「例の犬」といった意味で用いられることになる。すなわち、一見現象文のようだが、実は既知の事物について述べているという点で、主題文に近い。現象文を三尾の定義に忠実に狭く捉えれば、無助詞格で表現することはできない。しかし、仁田のあげる気づきの例や、「ああ、ビールがうまい」という菊地 (1997) のあげる「(その時生じた) 感覚」の場合には、無助詞格が可能である。

### 3.2 「は」「が」と無助詞格

「は」と「が」については非常に多くの論考があるが、現在「は」と「が」の基本的な意味は次のように考えるのが一般的だろう。

「は」：①主題           ②対比

「が」：①中立叙述   ②排他<sup>2</sup>

次の例を見てみよう。

- (45) a. このビール うまいね。  
      b. このビールはうまいね。  
      c. このビールがうまいね。

「このビールはうまいね」では、「他のビールはうまくない」という「対比」の意味が示され、「このビールがうまいね」は、「このビールだけがうまい」という「排他」の意味を表す。もう一つ、例をみてみよう。

- (46) a. 彼、いい加減な奴だ。  
      b. 彼はいい加減な奴だ。  
      c. ? 彼がいい加減な奴だ。

名詞句が強く発話されなければ、b.の「は」には「主題」という解釈も可能である。しかし、その場合も無助詞格とは発話される場面に違いがあるようだ。「彼」が主題になるということは、それ以前に話が始まっていて、その話に関連して「彼」が主題として取り上げられるのが普通だろう。しかし、「彼、いい加減な奴だ。」は、現実の彼の行動を思い浮かべて、詠嘆的に述べ立てており、ことがらを概念化する程度が「彼はいい加減な奴だ」に比べて弱い。もし「彼はいい加減な奴だ。」を無助詞格の場合と同じように強く発話すれば、「彼」が焦点化され、「対比」の意味を帯びることになる。「彼がいい加減な奴だ。」は、非文に近いが、あえて解釈しようとする「排他」の意味になる。無助詞格は、限定的な意味が加えられないという点で、それは主題の一つのありようではあるが、「が」「は」とは異なる独自の働きをしていると言える。

---

<sup>2</sup> ここで「排他」と意味分類した「が」は、「総記」と呼ばれることが多い。もともと久野(1973)で用いられた「総記」は、該当する者や物をすべて列挙しなければいけない場合の「が」の用法である。菊地(1997)は、問に対する答を提示するのが本質だとして久野の「総記」を「解答提示」と呼び直している。しかし、この「が」の用法は「…だけが～」という意味であるから、この意味合いを重視し、本稿では「排他」を用いた。



#### 4. 文の種類と無助詞格

文の種類によって、無助詞格を用いる方が自然な場合がある。それは、疑問文、否定文の一部、意志・依頼・命令文、倒置文の場合である。以下、順に見ていく。

##### 4.1 疑問文

現象文の疑問文では、無助詞が用いられるのが普通である。

- (47) 足 (φ / は / \* が) きれい?
- (48) はさみ (φ / \* は / \* を) 持ってる?
- (49) 阪神 (φ / \* は / \* が) 勝った?

これらの用例で「は」を用いると、「対比」の意味になる。現象文の疑問文になぜ「が」格が用いられないかについては、仁田 (1999 : 133)、野田 (1996 : 93) などで論じられている。眼前の現象をそのままに述べる現象文には主題がない。一方、質問するというのは、何かについて質問するわけだから、主題性があり、前提のない現象文を疑問文にすることはできない。そこで、現象文を疑問文にするときには無助詞格を用いざるを得ないということになる。一方、次の例のように、判断文の疑問文では、「は」と助詞がない場合とで違いはほとんど感じられない。

- (50) あんた、誕生日 (φ / は / \* が) 何日?
- (51) あのスーパー (φ / は / \* が) 何時までやってる?

##### 4.2 否定文

上でありのままを述べる現象文を疑問文化すれば現象文ではなくなると述べたが、否定文にもそれと同じことが言える。否定するからには、現象文では想定しない前提が必要で、普通「犬が走っていない。」とは言わない。しかし、名詞句が特定される場合、また、対立する事象が想定できる場合、すなわち、前提がある場合には、現象文でも否定文は可能であり、それが無助詞格であっても問題ない。

- (52) いつもの黒犬 (φ / が) 走ってない!
- (53) <駅に着いて>電車 (が / φ) 動いてない!

また、「が」以外の格が想定できる「ごはん まだ食べてない。」でも無助詞格が可能である。否定というのは、通常、肯定の事象が前提にあってそれを否定する。その意味では、話し手、聞き手両者にとって明らかなものを呈示する無助詞格は否定文に現れやすいとも言える。

#### 4.3 意志・命令・依頼文

意志・命令・依頼文では、主格の人称は明らかなので、助詞を用いないのが普通である。もし次の用例で（ ）の中のように「が」や「を」を用いれば「排他」の意味が生じる。

- (54) 私 やる。(私がやります)
- (55) あなた やって。(あなたがやって)
- (56) ちょっとそこ、どいて。(そこをどいて)

#### 4.4 倒置文

- (57) いらんいらん、そんなもの。
- (58) やめよう たばこのポイ捨て。(コピー)
- (59) なんだよ その目つき (OUT)

倒置文は、述部に焦点があり、それをはじめに述べる。述語がはじめに表現されると、格関係を特に述べ立てる必要はなくなるようだ。しかし、次の例に見るように「は」を付加することは可能である。その意味では、無助詞化が必ず起こるとは言えない。

- (60) いやあ、きれいな所ですね、ここは (天国)
- (61) 何を考えてんだ君は！ (ひき逃げ)

#### 5. まとめ

本稿で述べてきたことは、以下のようにまとめられる。

無助詞格は、話し手が聞き手に、双方にとって「これ」と指し示せる明らかなこと、もしくは、そう想定される特定の事物について注意を喚起するために用いる。そこで、無助詞格がよく用いられるのは、名詞句Xが次の場合である。<sup>3</sup>

- (1) 話し手、聞き手双方に明らか、もしくは、そう想定される指示代名詞、人称代名詞類。
- (2) 指示代名詞に準ずる、話し手、聞き手双方に明らか、もしくは、そう想定される事物。

また、次のような場合にも、無助詞格文が用いられる。

---

<sup>3</sup> 庵 (1998) は、無助詞格の適否について、名詞句が活性化されているか否かの違い「活性化度」が関係することを論じている。名詞句を既活性化するためには、「その名詞句をテキスト内に導入するか、その名詞句がテキスト内で話題 (の一部) になっていることが必要」だという。庵、またその先行研究である丹羽 (1989) の無助詞格は、無助詞格に他の助詞と交代できるものを含めている点で、本稿の無助詞格の範囲より広い。

- (1) 現象文を疑問文・否定文にする場合。
- (2) 意志・依頼・命令文

以上の条件を備えた上で、通常「が」が用いられる現象文においても、それが「気づき」や「感覚」を表す場合には無助詞格が用いられる。また、普通主題を表す「は」が使われる文においても、ことがらを詠嘆的に概念化せず述べ立てる場合には無助詞格が用いられる。無助詞格は、文の中で「は」「が」とパラダイムをなしており、独自に立てる意義があると考えられる。

#### <例文資料> (出典のないものは作例)

主婦：井出祥子・生田少子他編 1984『主婦一週間の談話資料 解説・本文篇』文部科学省研究費補助金特定研究「情報化社会における言語の標準化」(原文はカタカナで形態素単位の分ち書きがされているのを読みやすいように改めた。)

男性：現代日本語研究会編 2002『男性のことば・職場編 自然発話テキストデータ』ひつじ書房

徹子：テレビ朝日 1996『徹子の部屋』ビデオ・パック・ニッポン

日曜：「日曜喫茶室」NHK ラジオ 1988.2.7

日経：日本経済新聞 2005.4.3 朝刊

天国：白川道 2003『天国への階段』幻冬社

OUT：桐野夏生 2002『OUT』講談社

コピー：北村、山路、山吹 1981『広告キャッチフレーズ』有斐閣

ひき逃げ：砂本・水谷 1993「ひき逃げファミリー」『'93年鑑代表シナリオ集』映人社

#### 参考文献

庵功雄 1998「名詞句における助詞の有無と名詞句のステータスの相関についての一考察」『言語文化』35 一橋大学語学研究室

尾上圭介 1975「呼びかけの実現—言表の対他的意志の分類—」『国語と国文学』52 卷 12 号 (2001『文法と意味 I』くろしお出版に収録)

影山太郎 1997『日本語研究叢書 文法と語形成』ひつじ書房

菊地康人 1997「「が」の用法の概観」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房

楠本徹也 1992「ゼロ格の確立」『日本語教育学会創立 30 周年法人設立 15 周年記念大会予稿集』

久野暉 1973『日本文法研究』大修館書店

筒井通雄 1984「「ハ」の省略」『月刊言語』13-5

- 仁田義雄 1986 「現象描写文をめぐって」『日本語学』5-2 明治書院 (1999 (2版増補)『日本語研究叢書 日本語のモダリティと人称』ひつじ書房に改訂収録)
- 丹羽哲也 1980 「無助詞格の機能」『国語国文』58-10 京都大学
- 1988 「有題文と無題文、現象(描写)文、助詞「が」の問題(上)(下)」『国語国文』57-6,57-7 京都大学
- 野田尚史 1996 『新日本語文法選書1 「は」と「が」』くろしお出版
- 長谷川ユリ 1993 「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80号
- 藤原雅憲 1991 「話し言葉における助詞省略の効果」『日本語教育学会秋季大会研究発表要旨』
- 丸山直子 1996 「助詞の脱落現象」『月刊言語』25-1
- 三尾砂 1948 『國語法文章論』三省堂
- Tsutsui,M.1983 Ellipsis of Ga Papers in Japanese Linguistics Vol.9,ed.Shibatani,M. Kuroshio Publishers